

英語の呼びかけ語の談話標識的用法 (1)

The discourse marker use of english address terms (1)

松尾 文子*¹

Fumiko Matsuo

キーワード：呼びかけ語、談話標識、談話機能

Key words : address terms, discourse markers, discourse functions

要旨

本稿は、英語の呼びかけ語の談話標識的用法を考察する論文で、二部構成の前編である。前編では基本的論考として、英語の呼びかけ語と談話標識に関する先行研究を紹介し、さらに後編において検討すべき問題点を指摘する。後編では次の2点に焦点を当てる。(1) 呼びかけ語の談話標識的機能 (2) 呼びかけ語と談話標識が共起した場合の呼びかけ語の機能。

本稿の構成は以下のとおりである。第2章と第3章ではそれぞれ、英語の呼びかけ語と談話標識に関する先行研究を紹介する。第4章では、呼びかけ語と談話標識の機能上の類似点を述べる。第5章では、呼びかけ語と談話標識が用いられる位置と両者の機能について、文とTCU（ターン構成単位）における位置の観点から考察する。第6章では、呼びかけ語と談話標識の単独使用について述べる。第7章では、呼びかけ語と談話標識の機能上の違いを考える。最後に第8章では、今後の研究の方向性を述べる。

Abstract

This paper examines the discourse marker use of English address terms and my discussions are divided into two parts: as the preliminary study, I will introduce previous studies on English address terms and discourse markers and I will raise some points to be considered, which will be discussed in the following separate paper. In that paper, particular focus is directed at two questions: (1) discourse markerlike functions of address terms (2) functions of address terms in the cooccurrence of address terms and discourse markers.

This paper is structured as follows: previous studies on English address terms and discourse markers in section 2 and 3 respectively; the functional similarities between address terms and discourse markers in section 4; their functions from the point of the position in a sentence or TCU (turn-construction unit) in section 5; the stand-alone use of address terms and discourse markers in section 6; the functional differences between address terms and discourse markers in section 7. Finally, a further direction of this study will be given in section 8.

*1 札幌保健医療大学 Sapporo University of Health Sciences

1. はじめに

本稿は、英語の呼びかけ語の談話標識的用法を考察する論文の前編である。英語の談話標識に関する著書や論文に取り組む過程で、呼びかけ語が気になり始めた。論点を明らかにして読者の理解度を上げるために、例文には基本的に日本語訳を付していた。その際に疑問に感じたことがある。まず、呼びかける相手が誰か明白であるのになぜ呼びかけ語を用いるのか、呼びかけ語をそのまま日本語にすると不自然なことが多いのではないか。呼びかけ語が談話標識と共起する例を目にするが、その際の両者の機能は何か。さらに呼びかけ語の用いられ方を見て、聞き手を指定するいわゆる呼びかけの機能以外に、談話標識と似た機能があることに気づいた。

本稿は以下の2つのことを解明するための基本的な論考である。

- ① 呼びかけ語の談話標識的機能：談話標識と呼びかけ語に共通する機能と異なる機能
- ② 呼びかけ語と談話標識が共起する場合と、いずれか一方しか用いられない場合との違い

後編では、これらのことを解明する。

本稿の構成は以下のとおりである。第2章では呼びかけ語、第3章では談話標識に関する過去の論考を紹介する。第4章では第2章と第3章をもとに、呼びかけ語と談話標識の共通点を述べる。第5章～第7章では、実例を挙げて呼びかけ語の談話標識的機能を考察するための論点を記す。ただし、手元にある例から導き出した仮説を述べるので、今後さらに例を集めて、後編で厳密化・修正を施す。第5章では呼びかけ語と談話標識が用いられる位置と両者の機能について、ターン構成単位(TCU)と文における位置の観点から例文を挙げて論じる。第6章では呼びかけ語と談話標識それぞれの単独使用と共起について述べる。第7章では呼びかけ語と談話標識の違いなどを述

べる。第8章では、本稿をとおして見えてきた論点を整理する。

II. 呼びかけ語

1. Zwicky (1974) ¹⁾

Zwicky (1974) は、それまで詳細に論じられることのなかった英語の呼びかけ語を扱い、呼びかけ語として用いられる名詞(句)の形式的・統語的・機能的特徴を考察した。呼びかけ語の機能を call と address に分類したが、この分類はのちの呼びかけ語の研究に大きな影響を与えて基本的な区分となっている。call は聞き手の注意を引く機能を、address は話し手と聞き手の関係を維持したり強化する機能を持つ。

2. Levinson (1983) ²⁾

Levinson (1983: 71) も呼びかけ語の機能を call / summon と address に分類し、次のように定義する。呼びかけ語は聞き手を表す名詞句で、統語的・意味的に述語の項には組み込まれない。音調的には、呼びかけ語とともに用いられる文の本体から分離される。

3. Quirk et al. (1985) ³⁾

Quirk et al. (1985: 773-775) は、呼びかけ語は随意的な要素で、通例名詞句で、当該の文が向けられる1人あるいは複数の人を示すとす。機能に関してはZwicky(1974)¹⁾と同様に、call と address に分類する。call は聞き手の注意を引いたり、話が聞こえる範囲にいる人から当該の聞き手を選び出す。address は、話し手と聞き手の関係や聞き手に対する話し手の態度を表す。用いられる位置に関しては、文頭、文中、文尾のいずれも可能である。音調面では、呼びかけ語は節の他の要素からは独立していて、典型的には call の機能を持つ文頭の呼びかけ語は下降—上昇調か上昇調、address の機能を持つ場合は上昇調である。形式は、名前、職業を表す語句など8つに分類する。

4. Biber et al. (1999) ⁴⁾

Biber et al. (1999, 140, 1108-1110) によると、呼びかけ語は名詞句の形をとり、文における位置は自由で、メッセージの受け取り手を明示する。また、呼びかけ語は会話に携わる者どうしの社会的関係を明示したり維持するのに重要で、最も親しい関係を示すもの(親愛語)から最も距離が遠く相手に対する敬意を示すもの(敬称)まで、8つに分類する。

5. Leech (1999) ⁵⁾

Leech (1999) は、呼びかけ語が文頭で用いられる場合は聞き手を指定したり注意喚起する機能を、文末では聞き手を指定したり話し手と聞き手の社会的関係を維持・強化する機能を担うとする。

6. Carter and McCarthy (2006) ⁶⁾

Carter and McCarthy (2006 : 228-231) は呼びかけ語の形式を、名前・称号や敬称など5つに分類する。

呼びかけ語の談話機能として以下を提示する(pp.231-234)。

①呼びかけ

②ターンマネージメント

(1)聞き手の特定

(2)次の話し手を指名

(3)遮り行為を和らげる

③儀礼的(ritual)・社交的場面での使用

儀礼的な場面とは、食事が提供されるときに、発言が向けられる(食事をすすめられる)相手が話し手の視線や体の向きで明らかであるにもかかわらず呼びかけ語が用いられるような場合である。社交的な場面とは、挨拶や天候に関する会話のように、話される内容ではなくことばを交わすことじたいが重要であるような場面のことをいう。

④聞き手の尊厳が脅かされる場合にそれを緩和したり、発言を和らげたりする。

⑤話題管理：話題の開始・継続・移行・転換・終結

⑥ジョーク、からかい：友情や親しさを強化

7. Shiina (2007, 2008) ^{7),8)}

Shiina (2007, 2008) は、歴史コーパス(17-18世紀の gentry comedies) で呼びかけ語の文における位置と機能の関係を論じる。呼びかけ語の統語的・意味的特質、会話の参与者の社会文化的特性、伝達上の必要性とも関連付けている。歴史コーパスでは、会話の参与者の社会的地位や役割が呼びかけ語の使用法に影響を与えていて、呼びかけ語の選択範囲は現代英語よりもかなり広い(2007 : 17) ⁷⁾。また、呼びかけ語の語用論的含意は音調、形式、位置、会話の参与者の特質・役割や性格、物語(会話)のプロットが絡み合い、さらなる考察が必要だとする(2008 : 48) ⁸⁾。

文中での位置と機能の関係では、文頭では情報を提供する前に聞き手の注意を喚起する機能を、文末では聞き手が誰であるか明らかなので会話の参与者どうしの関係を維持する機能を持つ傾向にある(2007 : 19) ⁷⁾。

ひとつの呼びかけ語が複数の機能を持つこともある。また、呼びかけ語の形式を選ぶことじたいが対人関係調整機能を持つので、呼びかけ語の本来の機能は対人関係調整機能である(2007 : 22) ⁷⁾。

呼びかけ語の機能を4つ認める。

①対人関係調整：話し手と聞き手の関係の調整

②会話管理：発話の開始・終了、聞き手の指定、ターン交替、注意喚起

③情報管理：情報の流れの調整

④発話の力の管理：発話の力の強弱の調整

これらの機能と文中での位置に関しては以下のように述べる(2008 : 26-30) ⁸⁾。②では呼びかけ語の位置と機能に密接な関係がある。発話開始時には文頭、発話終了時には文末、

注意喚起の機能では文頭で用いられる。③では文頭で用いられるときにはターンや発話の開始、文中では情報の流れの調整、文末では主に対人関係調整の機能を持つ。④では主に文末で用いられる。実際の使用では、ひとつの呼びかけ語が複数の機能を持つこともある。

現代英語では話し手が発話に特別な含意(脅かし、ユーモア、敬意など)を与えないならば、ファーストネームの使用が標準である。そのような語用論的状况では、呼びかけ語の位置や形による意味的含意で、語用論的機能は十分に説明できると思われる(2007:17)⁷⁾。

8. Butler et al. (2011)⁹⁾

Butler et al. (2011:3) は、呼びかけ語の機能を2つに分類する。

- ①フェイスに係る機能で、会話に携わる者どうしの関係を作り、維持し、作り直す。
- ②ターンや話題の移行に係る機能で、会話の構造を組織化する。

9. Schaden (2005)¹⁰⁾

Schaden (2005:178-179) は呼びかけ語の機能として call と address の二分割の有効性を認めているが、この二分割は呼びかけ語の意味ではなく語用論的側面に係ると指摘する。つまり、呼びかけ語が何を意味するかではなく、話し手が呼びかけ語を用いることで何ができるか(what a speaker can do with a vocative)である。

そのうえで、3つの機能を挙げる(pp.181-182)。

- ①identificational: 他にも会話に携わる者がいる状況で、聞き手を確定する。
- ②predicational: 聞き手に何らかのpropertyを与える。
- ③activation: 聞き手は特定されているが、後続の発話に注意を向けさせる。

聞き手を特定する必要がある場合は①の、

聞き手がすでに特定されている場合は②か③の機能となる。

III. 談話標識

第3章では談話標識の機能を述べる。現代言語学の流れの中で談話標識が研究対象として表舞台に現われたのは、関連性理論の枠組みで分析した Blakemore の一連の論文によるところが大きい。その後さまざまな学者によって分析が進められたが、本稿では呼びかけ語を談話標識の1つとして扱った Fraser を取り上げる。ただし、Fraser は語用論標識(pragmatic markers) という呼び名を用い、現在では名称が定着した談話標識(discourse markers) とは若干のずれがある。なお、談話標識の定義、談話標識に含まれる表現、特徴、機能などは松尾・廣瀬(2014, 2015)^{11),12)} および松尾他(編著)(2015:322-344)¹³⁾、松尾(2016)¹⁴⁾ を参照されたい。

1. Fraser

1) Fraser (1996)¹⁵⁾

Fraser (1996) では、共通して固有の語用論的意味(話し手の潜在的な伝達意図を合図する言語的に記号化された手がかり)を持つ一連の語句を語用論標識(pragmatic markers)と称している(pp.167-168)。Fraser (2009)¹⁶⁾で若干改編されることになるが、Fraser (1996)では語用論標識を以下のように分類する。

- ①基本的語用論標識: 基本的なメッセージの発話の力を合図する。
- ②解説的語用論標識: 基本的なメッセージについてコメントするメッセージを合図する。
- ③並列的語用論標識: 基本的なメッセージに付け加えてメッセージを合図する。

(1) 呼びかけ標識

- a. 標準的の称号: John, Mr. President
- b. 職業名: waiter, doctor
- c. 一般名詞: brother, ladies and

gentlemen

d. 代名詞：you, somebody

(2) 不快感を表す標識：damned

(3) 連帯感を表す標識：my friend, as your superior

④談話標識：先行の談話と基本的なメッセージの関係を合図する。

(1) 話題転換標識：by the way, incidentally

(2) 対比標識：but, however, anyway

(3) 詳細表示標識：in other words, besides, and

(4) 推論標識：so, after all, consequently

呼びかけ語は呼びかけ標識として並列的語用論標識に含まれる。呼びかけ語は文によって伝えられる基本的なメッセージに付加されるメッセージを合図し、文と文の関係は示さないで談話標識からは省かれる(1999：942-943)¹⁷⁾。

2) Fraser (2009)¹⁶⁾

Fraser (2009) では並列的標識は解説的標識に吸収され、あらたに談話マネジメント標識が設定される。改編後の語用論標識の分類は以下のとおりである。

①基本的標識

②解説的標識

③談話標識

(1) 対比標識

(2) 詳細表示標識

(3) 推論標識

④談話マネジメント標識

(1) 談話構造標識：後続の部分が談話の全体構造の中でどのような位置を占めているかを示す：first, in summary

(2) 話題方向付け標識：後続の談話の話題に関する話し手の意図を示す：anyway, but, by the way

(3) 注意喚起標識：話題の転換が生じていることを示す：anyway, now, oh, ok, so, well, then

2. 松尾他(編著)(2015)¹³⁾ および松尾・廣瀬(2015)¹²⁾

1) 松尾他(編著)(2015)

松尾他(編著)(2015)では、談話標識を「聞き手が発話を正しく理解できるように話し手の発話意図を合図するというコミュニケーション上の役割を担う」ものとする(p.336)。

談話標識の機能として4つを挙げる(pp.336-337)。

①談話構成機能：話し手が談話をどのように組み立てていくのかを合図する。

②情報授受・交換機能：話し手が情報を受け取ったことや、新旧いずれの情報を伝達しようとしているか、情報を聞き手と共有したいかなどを合図する。

③態度・感情表明機能：話し手がこれからどのようなスタンス(態度・感情・様式・確信度・明白性)で陳述するのかを合図する。

④対人関係調整機能：会話を円滑に進めるために、話し手と聞き手の人間関係を調整する。

1つの談話標識が複数の機能を同時に担うという多機能性が談話標識の大きな特徴である。詳細は同書を参照されたい。

2) 松尾・廣瀬(2015)¹²⁾

松尾・廣瀬(2015)では、談話標識分析の20の観点を設定する。談話標識は品詞的に多種多様である。具体的には、接続詞的表現(and, but, so など)、副詞的表現(actually, however, now など)、間投詞的表現(look, oh, well など)、前置詞句表現(after all, by the way, in fact など)、レキシカルフレイズ(I mean, you know, you see など)が含まれる。したがって、統一的・画一的な分析が困難であるので20の観点を設定した。20の観点には、①先行発話との関わりを考えるもの、②情報との関わりを考えるもの、③談話・会話構造との関わりを考えるもの、④発話態度との関わりを考えるもの、⑤対人関係

との関わりを考えるもの、⑥その他の語法・文法的な観点の6つのタイプがある。これらの中から、呼びかけ語と関係がある観点を取り上げる。観点9・10・11は③、観点16は④、観点19は⑤に該当する。

観点9：談話・会話の開始セクション、話題セクション、終結セクションのうち、談話標識が主にどのセクションと関る機能を果たすか。

観点10：談話・会話のやり取りの中で、談話標識が順番取りとどのように関るか。

観点11：談話標識がもっぱら聞き手の注意を喚起する機能を持つか。

観点16：談話標識が、相手の発話に対して話し手が驚きや喜び、怒り等どのような感情を抱いたことを合図するか。

観点19：談話標識が、聞き手の「面子」(face)を立てる機能を果たすか。

今後これらの観点を念頭に、談話における呼びかけ語の機能や、呼びかけ語と談話標識が共起する場合の談話的機能について考える。

IV. 呼びかけ語と談話標識の共通点

前述の呼びかけ語と談話標識の説明から、両者の共通点を探る。いずれも統語的に文構造に組み入れられず、文における位置は文頭・文中・文末で用いられる可能性があり比較的自由である。当該の表現の有無が文の真理条件に関することはなく意味的に随意的な要素である。音調的には、文の他の要素から独立している。

まず、呼びかけ語から談話標識との共通点を見る。Zwicky (1974)¹⁾ 以来の機能区分の call と address では、前者は聞き手に対する注意喚起、後者は話し手と聞き手の関係の維持・強化が主な機能である。後者の機能は、Brown and Levinson (1987)¹⁸⁾ 以来、言語学でポライトネスを論じる際によく用いられる概

念であるフェイスに関り対人関係を調整するものである。その他、話題管理や談話の流れ・構造の管理、発話の力の調整は談話標識にも見られる機能である。

次に、談話標識から呼びかけ語との共通点を見る。Fraser (1996)¹⁵⁾ は語用論標識の1つとして並列的語用論標識を設定し、呼びかけ標識はそれに含まれる。Fraser (2009)¹⁶⁾ では談話マネジメント標識という区分を新たに設定し、それには注意喚起標識が含まれる。松尾他(編著) (2015)¹³⁾ で提案した談話標識の4つの機能のうち、談話構成機能と対人関係調整機能は呼びかけ語のそれと共通する。また、松尾・廣瀬 (2015)¹²⁾ の談話標識分析の20の観点は呼びかけ語の機能との共通点が見られる。

このように、呼びかけ語も談話標識も語用論的機能、つまり話し手の発話意図を合図するというコミュニケーション上の役割を担うという点で共通点が見られる。

次章から呼びかけ語の談話標識的機能を論じるためのいくつかの観点を述べていく。

V. 呼びかけ語と談話標識が用いられる位置

本章では、呼びかけ語と談話標識が共起して用いられる位置に関して2つの観点から問題点を述べる。ターン構成単位 (turn-construction-unit、以下 TCU) における位置と、1つの文(発話)における位置である。ターン (turn) とは、話し手が一回の順番で発するいくつかの文(発話)から構成される単位のことである。スムーズに会話が進む場合、通常は1人の話し手がターンを終えると話者交替が起こり、別の話し手が新たにターンを開始する。TCU が単一の、あるいは複数の文(発話)で構成されることもあるし、句や語で構成されることもある。また、不完全な形の文(発話)が現われることもある。以下、「文(発話)」は基本的に「文」と表記する。

1. TCU における位置

1) TCU 頭

TCU 頭には、TCU が単一の文(相当)から成る場合も含める。ターンの頭という位置は、続く発話で伝えられる内容や話し手の態度などを示す手がかりとなる場所である。呼びかけ語も談話標識も TCU 頭で用いられることが圧倒的に多く、両者が共起する場合も同様である。以下、本稿で提示する例ではいずれも、呼びかけ相手(聞き手)が誰なのか明らかであるにもかかわらず、呼びかけ語が用いられている。また、呼びかけ語がどのような機能を持ち、呼びかけ語を用いることでどのような効果が生じるのかについては現段階での暫定的な見解を示し、さらに実例を収集したうえで、後編で明らかにする。

次例は、弁護士の Mitch に彼が勤務する法律事務所の警備担当者 Devasher が話しかける場面である。Devasher は車を止めてトランクからスーツケースを取り出して話を切り出す。

(1) DEVASHER: *So, Mitch, this is a debriefing.*

I know pretty much what you told the fellas, so I kinda got the picture. Now it's my job to give you the picture.—*Firm* [映画台本]
(さて、ミッチ、これは報告ミーティングだ。君がみんなに話したことはよく知っているから、状況はだいたい分かっている。そこで、君にそれを知らせるのがぼくの仕事なんだ。)

この *so* は、一連の会話を開始する合図となっている。会話の開始や話題の転換、本題の導入などで呼びかけ語がしばしば用いられるが、この呼びかけ語は後続の発話に注目するようという注意喚起の機能を持つ。

次例は、老弁護士の Mickey が後輩弁護士の Frank に話す場面である。Frank は勝ち目のない裁判をしようとしている。

(2) MICKEY: *Look, Frank, I know what you're goin' through. You're tryin' to wipe out some old business. I understand that! But not now!*—*Verdict* [映画台本] (おい、フランク、おまえがどういう目にあうか分かっているぞ。これまでの仕事の埋め合わせをしようとしている。そのことは分かる!だが、今はだめだ!)

この *look* は、先行発話を受けて聞き手の注意を喚起して自分の見解を述べる機能を持つが、これから述べることは極めて重要なのでしっかり聞いて欲しいという話し手の態度を強調している。さらに呼びかけ語を用いることで、相手を説得しようとする姿勢がより強くなる。

TCU 頭における談話標識と呼びかけ語の共起では、以下のような特徴がある。会話の開始や、先行する相手の発話を受けずに、すなわち先行発話とつながりがない場合は(注1)、呼びかけ語は相手に対する注意喚起の機能を担ったり、同様の機能を持つ談話標識の機能を補完して、注意喚起の機能を強化する。先行する相手の発話を受けて用いられる場合は、注意喚起の機能のほかに、説得や励ましといった話し手の反応や態度を示す。

2) TCU 中

本節では、TCU の途中で呼びかけ語と談話標識が用いられる例を挙げる。

次例はある女性と牧師の会話である。女性は夫婦はクリスマス時に旅行に出かけるので、クリスマス恒例の行事はしないことに決めた。それを耳にした牧師が女性宅を訪ねて来た。牧師のことばに対して、女性は強く異を唱えている。

(3) "It is a bit crazy, isn't it?" he said, looking at the pile of shopping bags he had deposited nearby.

"Yes it is. *Look*, we're fine, *Doug*, I promise. We're happy and healthy and just relaxing a

bit. That's all.”—Grisham, *Christmas* (「クリスマスの行事が少しばかり馬鹿げていると言うのですか?」と彼は足元に積み上げた買い物袋の山に目をやって言った。「ええ、そうです。いいですか、お断りしておきますが、私たちは元気です。幸せで、健康で、今は少しのんびりしているだけなんです。それだけのことです。」)

クリスマスのお決まりの行事を否定した女性に、牧師は馬鹿げたことをしていると言いたいのか問い正したのに対して、女性はその通りだと応じた。続いて look で発話を始め、呼びかけ語と I promise を用いて主張を強めている。女性は直前の会話でも“we're fine”と述べていて、再びその発言を持ち出して確認している。

次例は、法律事務所に勤務するアソシエイト Kyle と大学時代の友人の会話である。Kyle は友人に裁判の証拠となる Bennie の行動を隠し撮りするよう依頼している。

(4) “And if they don't go perfectly?”

“I'll rescue you.”

“Great.” A long, nervous swig from the flask. “So, Kyle, let's say we get Bennie on video. How do you, not me, but you, go about identifying him?”—Grisham, *Associate* (「それで順調に進まなければ?」「ぼくが救ってやるさ。」「すばらしい。」(友人は)長い時間をかけて不安そうに懐中瓶から(ウオッカを)ぐいと飲んだ。「さてカイル、ベニーを録画できたでしょう。おまえは、おれじゃなくておまえは、どうやって奴の身元を突き止めるつもりなんだ?」)

友人は“Great.”と Kyle の説明に納得した後、ウオッカを飲んで間を取り、so を介して本題(隠し撮りの相手の正体を突き止めること)を導入する。(3)(4)とも先行する相手の発話に対する応答や反応を示したのち、談話標識と呼びかけ語で会話を次の段階に進める。(3)の look で

は自分の見解を述べることを、(4)の so では本題を導入することを示す。(3)では呼びかけ語が文末で用いられて主張を強め、(4)では“Great.”でいったん発話を中断したのち、聞き手に発言に注目するよう再度注意を喚起する。

次例は、FBI 長官が弁護士の Mitch に身の危険が迫っていると警告する場面である。

(5) “Mitch, no lawyer has ever left your law firm alive. Three have tried, and they were killed. … The firm has an extensive surveillance operation on the fifth floor. Your house and car are bugged. Your phones are tapped. Your desk and office are wired. Virtually every word you utter is heard and recorded on the fifth floor. They follow you, and sometimes your wife. They are here in Washington as we speak. *You see, Mitch*, the firm is more than a firm. It is a division of a very large business, a very profitable business. A very illegal business. The firm is not owned by the partners.”—Grisham, *Firm* (「ミッチ、君の事務所を生きて辞めた弁護士は今までに1人もいない。3人が辞めようとしたが、殺された。…事務所は5階に広範囲に及ぶ監視システムを備え付けている。君の家や車も盗聴されている。電話もそうだ。デスクやオフィスにも盗聴器が仕掛けられている。事実上、君のことは一言もささず5階で聞かれ、録音されている。君を尾行しているし、ときに奥さんもだ。われわれが話している今この時にも、奴らはここワシントンにいるんだ。いいか、ミッチ、あの事務所は単なる事務所じゃない。巨大なビジネス、巨額の利益をあげているビジネスの一部にすぎない。しかも、きわめて違法なビジネスだ。あの事務所は、(事務所の)パートナーが所有しているのではない。)」

長官は Mitch が勤務する法律事務所の恐ろしさを説明したうえで、you see を用いて相手に

理解を求め、さらに呼びかけ語で後続の発話に注目させている。

Clayman (2012)¹⁹⁾ は電話での日常会話をコーパスとして、呼びかけ語の用法を考察する。対象となる呼びかけ語は、ターン内の構造上の継ぎ目で、話し手のフロア（話し手が発言する主導権）の確保が保証されていない可能性がある場所で用いられるものである。このような呼びかけ語は、ターンを延長（発言を継続）して、Clayman のいう turn constructional pivots として機能するのと同時に、先行の統語単位を終わらせて次の単位を始める機能をも持つ。このような呼びかけ語を *pivotal or unit-bridging address terms* とも称している (p.1860)。また、呼びかけ語以外で同じ機能を持つものとして談話標識の *you know* を挙げている。

2つの異なる統語単位（発話）の間で呼びかけ語で用いられる構造について、以下の4つのタイプを認めている (pp.1859-1860)。

(6) Ann: -> Y'don't look it Jen ah must be honest. (Clayman 2012: 1859) (注2)¹⁹⁾

- ① <You don't look it><Jen><I must be honest.> (three discrete TCUs)
- ② <You don't look it Jen><I must be honest.> (two discrete TCUs)
- ③ <You don't look it><Jen I must be honest.> (two discrete TCUs)
- ④ «You don't look it <Jen» I must be honest.> (pivotal TCUs)

① は“You don't look it”、“Jen”、“I must be honest.”が独立した形になっている。②は呼びかけ語の *Jen* が前の文の文末に、③は後の文の文頭に來ている。④は呼びかけ語が前の文の文末に來ていると同時に、後の文の文頭位

も占めているという形で、これが *pivotal TCUs* である。今後このような位置で用いられる呼びかけ語と談話標識の共起について検討する。

3) TCU 末

本節では、TCU 末で呼びかけ語と談話標識が用いられる例を挙げる。

次例は、Kane and Cabot 銀行の頭取が、Kane 家の一人息子の William に取締役役に就任することを提案する場面である。彼が25歳になる前にこのような提案をした事情を説明し終えたあと、取締役会に参加してくれないかと打診している。

(7) “It's true your father was elected when he was twenty-five. However, that's no reason to prohibit you from joining the board before then if the other directors support the idea, and I know that they do. … You will be in a stronger position to influence that decision if you have been working for Kane and Cabot during those five years rather than as a grand functionary at Lester's. *Well, my boy, will you join the board?*”—Archer, *Kane* (「確かに、君のお父さんは25歳で(取締役役に)選ばれた。しかし、他の取締役が支持してくれるなら、25になる前に君が取締役会のメンバーに入るのを禁じる理由はないし、彼らが支持してくれることも分かっている。… レスター銀行の幹部としてではなく、その5年間をケイン・アンド・キャボット銀行で働いていたら、その(後任取締役の)決定に影響を及ぼすいっそう強力な地位になる。さてどうだ、君、取締役会に参加してもらえないかい?」)

well によって相手に依頼することに対するためらいを表して気遣いを示し、*my boy* という Biber et al. (1999)⁴⁾ などの分類による親愛を示す呼びかけ語によってさらに丁寧な表現になっている。

TCU 末で談話標識と呼びかけ語が用いられると、呼びかけ語によって(7)の依頼に対する応答を求めるような、相手に何らかの反応を促す場合が多い。この用法では、呼びかけ語が疑問文と共に用いられることが多いが、疑問文という文形式での呼びかけ語の使用については、今後さらに検討したい。

2. 文における位置

1) 文頭

本節では、呼びかけ語と談話標識の双方が文頭で用いられる例を挙げる。

次例は、Mary Alice と名乗る女性からの電話を FBI 捜査官の Wayne Tarrance が受ける場面である。Tammy は Tarrance の秘書である。

(8) The phone rang once. Tarrance slowly lifted the receiver. "Mary Alice," he said softly.

"Wayne baby! How'd you guess?"

"Where is he?"

"Who?" Tammy giggled.

"McDeere. Where is he?"

"Well, Wayne, you boys were hot for a while, but then you chased a wild rabbit.

Now you're not even close, baby. Sorry to tell you."—Grisham, *Firm* (電話の呼び出し音が一度鳴ったところで、タランスはゆっくりと受話器を取り上げた。「メアリ・アリスだな。」と静かな口調で言った。「ウェインね!よく分かったわね。」「奴はどこにいるんだ?」「誰のこと?」タミーはくすくす笑った。「マクデアだ。どこにいる?」「そうねえ、ウェイン、あなたたち、しばらくは躍起になってたけど、野生のウサギを追いかけてるようなものだったわね。でも、近くに来たとさえ言えないわよ、残念だけど。)」

wellで話すべきことばを探している態度をおわせて、McDeere の居所を知りたがる

Tarrance をじらしている。さらに呼びかけ語を挟み込むことで、発言権を確保して情報を提供する意思はあることを示す。well に関しては(7)も参照されたいが、そこでの呼びかけ語は親愛の情と丁寧さを示す役割を果たしている。

次例は Harvey がある銀行の頭取をウインブルドンに招待して、テニスの試合を観戦しながら話している場面である。以下は、頭取は後継者探しに頭を悩ませているという話をした次のことばである。

(9) "Now, Harvey, I know you too well to expect this invitation to have been just for pleasure."—Archer, *Penny* (「ところで、ハーヴェイ、私は君のことがよく分かってる。この招待が単なる娯楽のためだけだとは思わないね。)」

now で前言とは異なる話題に転換して、さらに呼びかけ語で聞き手の注意を喚起している。

2) 文中

本節では、呼びかけ語が文中で用いられる例を挙げる。

次例は Anne Osborne と私立探偵の会話である。彼女は夫の浮気を知らせる匿名の手紙を受け取り、探偵に調査を依頼している。

(10) "What about the letters?" asked Anne, suddenly remembering them. "I suppose they must have come from someone jealous of my husband's achievement."

"Well, as I pointed out to you last week, Mrs. Osborne, tracing the sender of anonymous letters is never easy. …"—Archer, *Kane* (「手紙はどうでしたか?」とアンは急に思い出して尋ねた。「主人の業績に嫉妬した人からに違いないと思いますわ。」「そうですね、先週申し上げたように、オズボーンさん、匿名の手紙の差出人を突き止めるのは簡単じゃないんですよ。…)」

well はためらいを表す機能を持つので、これから相手にとって好ましくないことを伝えることを知らせ、呼びかけ語を文中で用いることで後続の部分に注目するよう促して伝えたい内容を述べる。文中の例は少ないが、呼びかけ語の機能は主に後続の発話に注目させることである。

3) 文末

本節では、呼びかけ語が文末で用いられる例を挙げる。

次例では、老弁護士 Mickey が後輩の弁護士 Frankie Galvin の仕事ぶりに苦言を呈している。しかし、Galvin は全く聞く耳を持たないので最後通牒を突きつける。

- (11) GALVIN: What are you, my nanny?!
 MICKEY: *Now*, listen to me, *Frankie*.
Frankie, listen to me 'cause I'm done fuckin' with you! I can't take this anymore. I mean, you're not gonnnna change?—*Verdict* [映画台本] (「あんた、何なんだ。おれの乳母かい?」「いいか、聞くんだ、フランキー。フランキー、よく聞くんだ。おまえとはもうたくさんだ!これ以上付き合ってもらえん。おまえは変わるつもりはない、ってことだろ?」)

now で後続の発話に注目させ、文末の呼びかけ語で命令の力を強める。さらに、次の文頭で同じ呼びかけ語を続けて用いることで再び後続の発話に注目させていて、Mickey の苛立ちが表される。

次例は FIB 捜査官の Tarrance と弁護士 Mitch の会話である。Tarrance は重要なファイルの提供を Mitch に求めている、手に入れば謝金を半額払い、残金は公判後に払うと言った。それに対して Mitch は服役している兄を

釈放してくれるのか尋ねる。

- (12) “And my brother?”
 “We'll try.”
 “Not good enough, Tarrance. I want a commitment.”
 “We can't promise to deliver your brother. Hell, he's got at least seven more years.”
 “*But*, he's my brother, *Tarrance*. I don't care if he's a serial murderer sitting on death row waiting for his last meal. He's my broher, and if you want me, you have to release him.”—Grisham, *Firm* (「で、兄はどうなる?」「努力するよ」「それじゃ、十分じゃない、タランス。確約してくれ。」「兄さんを釈放する約束はできない。少なくともあと7年は刑期が残ってるんだぞ。」「でも、ぼくの兄なんだぞ、タランス。彼が最後の晚餐を待って死刑囚の獄舎で座っている連続殺人犯でも、そんなこと構わない。彼はぼくの兄なんだ。だから、ぼくの力を借りたいなら、兄を釈放する必要がある。」)

Tarrance が釈放は確約できないと応じたのに対して、Mitch は抗議する。but で反駁の態度を示し、文末の呼びかけ語で反駁の力を強めている。but の後でポーズを置くことで、この態度がいっそう強調される。

(11)(12)は、文末で呼びかけ語を用いることで命令や反駁といった発話の力が強められているが、それとは逆に発話の力が弱められたり、相手に対して親しみを表すこともある。次例は Metcalfe とオックスフォード大学総長との会話である。総長からイギリスにきた理由を尋ねられ、持馬が出走するのを見に来たと答えた。同席した Metcalfe の友人が持ち馬がレースで優勝したことを伝えたのに対して、いたずら好きの総長は次のように答える。

- (13) “*Well*, you must have been very pleased with the result, *Mr Metcalfe*.”

“Well, sir, I guess I was lucky.”—Archer,
Penny (「そりゃあ、(レースの) 結果にさぞ満足しておられるでしょうな、メトカーフさん。」
 「ええ、まあ運が良かったのでしょう。」)

well で少しばかり驚いている様子を示し、文末の呼びかけ語で相手に対する親しさを表すが、おそらく総長は意図的に驚きと親しさを示しているのであろう。

次例は、路地に止めてある綿花輸送トラックの運転手に、すぐさま車を移動させるように言う場面である。

- (14) DUTCH: Get this thing out of here, will ya?
 DRIVER: Look, this ain't your cotton truck, and this ain't your alley! So just cool it, *my brother*.—*Firm* [映画台本] (「ここからこいつを動かせよ、え?」「あんなあ、これは綿花輸送トラックじゃないし、ここはおまえの路地じゃない! だから、落ちつけよ、あんた。」)

この so は結果を表すが、先行部分との論理的関係を示すのではなく、発話行為に関っている。先行部分で述べたことを根拠に、「だから気持ちを落ち着かせて車を移動させよ」と命令している。親愛を表す呼びかけ語を用いることで、命令文の強制力を弱めて相手をなだめようとしている。

次の(15)(16)では呼びかけ語は文末で用いられているが、直後の and や but を介して発話が続いている。次例は、ある計画に関して仲間のそれぞれがプランを持ち寄り話し合う場面である。しかし James は案を持って来ず、仲間に責められてしどろもどろで弁解した。James のことばを Stephen が遮って話す。

- (15) James was stammering helplessly. Stephen cut him short.
 “Now, listen, *James*, and listen carefully.

We meet here again in twenty-one day's time. By then we must know each other's plans backwards. One error could blow the whole thing. Do you derstand?”—Archer, *Penny* (ジェームズは困ってしどろもどろになった。ステファンが割って入った。「いいか、ジェームズ、聞いてくれ、よく聞くんた。われわれは3週間後にまたここに集まる。それまでに前に出しあったお互いのプランをよく理解しておかなければならない。1つのミスが全てをぶち壊すかもしれない。分かったか?」)

まず、now で相手のことばを遮って自分の発言に注意を向けさせる。さらに文末の呼びかけ語で命令の力を強めると同時に、後続の内容が重要であることを示している。Stephen は James に対して苛立っていて、“listen”を繰り返して念を押している。(11)も同じような構造になっているが、(11)では文末の呼びかけ語でいったん文は終了し、あらためて次の文の文頭で呼びかけ語を繰り返している。(11)では、前件の“Now, listen to me Frankie”と、後件の“Frankie, listen to me …”は完全に別個の単位になっている。一方(15)では、and を介して“Now listen to me”と“listen carefully”はつながっている。

次例では、James が恋人と彼女の父親とレストランで話をしている。父親は本心はこのできごとを詳しく話したいと思っている。

- (16) “Daddy, you know you're not meant to tell anybody about that.”
 “Sure, but James is family now.”
 “Why can't you tell anyone else, sir?”
 “Well, it's a long story, *James*, but it was quite an honour for me. …” —Archer, *Penny* (「パパ、そのことは誰にも言わないことになってたじゃない。」「分かってるさ。しかし、ジェームズはもう身内だよ。」「なぜ他の人に話してはいけないのですか?」「うん、そうだな、話せば長くなるんだ、ジェームズ。でも、

私にはきわめて名誉なことだった。…」)

well でどう答えようか考えていることを表してもったいぶった態度を示す。呼びかけ語で相手に対する親愛の情を示すと同時に、話し手は話し続ける意志があること(発言権の確保)も示していると考えられる。

呼びかけ語で完全に文が終了して、and や but なしに次の文が続くのとこの形で違いがあるのかを今後検討する。

VI. 呼びかけ語・談話標識の単独使用／ 談話標識との共起

1. 呼びかけ語の単独使用

Rendle-Short (2007: 1512)²⁰⁾ は、呼びかけ語は通例、単独で TCU を構成しないので、呼びかけ語を用いることで後に発話が続くことを示すとする。また、呼びかけ語を用いることで、相手の発言を封じて発話の順番取りをすることにもなる。

Butler et al. (2011: 23)⁹⁾ は、オーストラリアの Kids Helpline という子どもや若者向けの電話カウンセリングを材料に、カウンセラーのターン頭における呼びかけ語の使用を分析する。そのデータでは、しばしば呼びかけ語は上昇調で発話され、相手(クライアント)に対する呼びかけの機能を果たしている。呼びかけ語を用いることで、呼びかけ語以降の発話は先行の発話とつながりがないことや、後続発話が重要であることを示す。

呼びかけ語は語彙的特徴によって、話し手の発話態度や対人関係を示すことができる。たとえば、相手を baby や honey のような親愛の情を表す語で呼ぶのか、bastard や idiot のような好ましくない評価を表す語で呼ぶのか、ファーストネームで呼ぶのか、フルネームで呼ぶのかなどによって、話し手が相手をどう捉えているのかが分かる。さらに、呼びかけ語の単独発話によってどのような機能が果たされるか、話し手の発話意図はどのように語用論的

に解釈されるのかを今後検討する。

2. 談話標識の単独使用

談話標識が単独で用いられて1つの TCU を形成することがある。次例は互いに配偶者がいる男女の会話である。本屋で偶然出会って互いが気になっていた2人は電車で再会し、その本屋で会う約束をした。約束の本屋には男が先に到着して、女を待っていた。女が遅れてやって来て、男の姿が見えた瞬間に言い訳を始め、同時に男はずっと待っていたと話し始めた。

(17) “Anyway.”

“So.”

“Here we are.”—Harper, *Love* (「とにかく。』

「ということで。」「僕たちやっと出会えたってことだ。)」

男は anyway でそれまでの話をまとめようとする。女は「結果的には」という気持ちで“So.”と答え、同時に相手に話を引き継いで欲しいことを匂わせる。

次例は夫婦関係が破綻している Macon と彼の友人の会話で、友人が自分の経験談を話した後の場面である。

(18) He sat back triumphantly in his chair. “So,” he said.

“So,” Macon said.

“So you get my point.”

“What point?”

“You have to let her know you need her.”

—Tyler, *Tourist* (彼は勝ち誇ったように椅子に座り直し、「ということで。」と言った。「ということで。」とメイコンが返した。「ということで、私が言いたいことは分かっただろ。」「言いたいことって?」「お前が必要なんだってことを彼女に知らせないとだめだよ。)」

友人は so で自分の発言から何を言いたかったかの結論を導き出すように相手を促している。それを Macon が引き取って“So.”と続け、さら

にまた友人が so を介して発話を続ける。

談話標識の単独用法としては、And? / But? / So? / Like? などのように、相手に追加情報を求めて発話を促す用法がある (松尾・廣瀬 2015: 6)¹²⁾。

このように談話標識は、単独で1つのターンを形成する場合でも、後続の発話の方向性を示すことができる。また、談話標識をそのまま引き取って次の話し手が会話を続けることもある。一方、呼びかけ語には語彙的特徴によって話し手の態度や発話意図を示す可能性はあるが、談話標識のように会話の方向性を明示する機能は(ほとんど)ないと思われる。したがって、発話意図に関して、呼びかけ語は用いられる文脈に依存して語用論的に解釈される必要性が高いと言えるのではないだろうか。

3. 呼びかけ語と談話標識の共起

本節では、呼びかけ語と談話標識の共起について考える。談話標識だけでも話し手の発話意図は伝わるが、呼びかけ相手は明白であるのになぜ呼びかけ語をあえて用いるのだろうか。ここでは、呼びかけ語が複数の談話標識と共起する例を挙げる。

次例は Harvey が銀行家や船主などを招いて食事をしている場面である。彼は愛馬を有名なレースに出走させることになっている。

(19) “You must have a better chance this year than ever before, Harvey,” said the senior banker.

“Well, you know, Sir Howard, Lester Piggott is riding the Duke of Devonshire's horse, Crown Princess, and the Queen's Horse, Highclere, is the joint favorite, so I can't afford to over-estimate my chances. When you've been third twice before, and then favourite and not placed, you begin to wonder if one of your horses is going to make it.”—Archer, *Penny* (「今年はきっとこれまでよりもチャンスがあるよ、ハーヴェイ。」

と年長の銀行家が言った。「しかしですね、サー・ハワード、レスター・ピゴットがデヴオンシャ公の馬のクラウン・プリンセスに乗るし、女王の馬のハイクレアが本命だから、チャンスを過大評価する余裕はないのですよ。これまで3着が2度、本命の時でも入賞しなかったのだから、あなたの持ち馬の1頭が勝てるかどうか、疑問に思い始めるでしょう。)」

Harvey は相手の発言内容に同意できないことを well で遠慮がちに示し、you know で次に述べることにに対する理解を求める。呼びかけ語によって、さらに相手に理解を促す。

次例はホテルの2人の管理職がメイドに話しかける場面である。Bextrum はマネージャー、Paula は客室係主任、Ventura はメイドである。副支配人のポストを現場スタッフから選ぶことになりメイド仲間は Ventura に応募を勧めるが、なかなか決心がつかない。

(20) BEXTRUM: Rather extraordinary due to overbooking and understaffing we've decided to accelerate your application.

PAULA: And move you directly into management after the six-week training.

BEXTRUM: With the proviso of course that you pass the practical exam and fulfill each requirement for every station. So you see, Miss Ventura, sometimes when life shuts one door, it opens a window. So jump.—*Maid* [映画台本] (「かなり異例のことだが、オーバーブッキングと人手不足のために、あななの適用を早めることになりました。」「そして、6週間の訓練ののち、すぐにマネージメントに移動してください。」「実地試験を通して全ての部署のそ

それぞれの要求を満たすという条件付きですが。さあ、ね、ヴェンチュラさん、人生で1つのドアが閉まると、窓が1つ開くこともあるのです。だから、飛んでみなさい。)」

まず so で相手に注意を喚起して、you see で「ね、あなたも分かっているでしょうけど」と理解を促す。さらに、呼びかけ語を用いることで相手を強く勇気づけるニュアンスが生じる。

談話標識と共に用いる場合の呼びかけ語の機能については5章で論じたが、本節のように複数の談話標識と呼びかけ語が共起する場合もある。呼びかけ語がなくてもある程度、話し手の意図は伝わるにもかかわらず、あえて呼びかけ語を用いる理由を、今後明らかにする。

VII. 呼びかけ語と談話標識の違いなど

1. 注意喚起の合図

呼びかけ語も談話標識も、注意喚起の機能を持つ。注意喚起の機能を持つ談話標識としてよく用いられる語の違いは、以下のとおりである。so は、話し手があらかじめ持ち出そうとしていた話題を導入する (Bolden 2006 : 663, 2009 : 978) ^{21),22)}。oh は、今しがた話し手の頭の中に思い浮かんだ話題を導入する (Bolden 2008 : 316-317; 松尾他 (編著) 2015 : 663) ^{23),13)}。look は、新たなaction を始めたり再開する合図となる (Sidnell 2007) ²⁴⁾。well は、この語自体が表す熟慮の態度が対人関係にも貢献して、ためらいを示すことで相手に配慮しながら注意を喚起するニュアンスが生じる (松尾他 (編著) 2015 : 260) ¹³⁾。

呼びかけ語の call の機能は、聞き手の注意を引くことである。呼びかけ語で注意喚起することと、談話標識で注意喚起することに違いはあるのだろうか。談話標識の場合は、注意喚起をした後に後続発話で何がなされるか、どのような情報が提供されるかの手がかりとな

るが、呼びかけ語の場合はそのような機能は(ほとんど)ないと思われる。さらに、談話標識と呼びかけ語をともに用いて注意喚起する場合と、いずれかのみで注意喚起する場合の違いは何か、後編でこれらのことを明らかにする。

2. 応答で用いられる場合

Question / Answer の隣接対の応答でよく用いられる談話標識の違いは、以下のとおりである。oh は、尋ねられたことに関する情報がすでに与えられていたり、当該の質問の適切性や妥当性について問題があることを示す (Heritage 1998 : 326) ²⁵⁾。look は yes-no 疑問文の応答で用いられる場合、問いに対してストレートに yes / no で答えずに答え方の方向を変えることを示す (Sidnell 2007 : 392-394) ²⁴⁾。well は wh 疑問文の応答として用いられる場合、率直な答ではないことを示す (cf. (8) (16))。

応答の文頭で用いられる呼びかけ語について、Clayman (2013 : 293-294) ²⁶⁾ は、問いに対する応答をあからさまに拒否するとき呼びかけ語が用いられることがあるとする。また、先行の問いに対する不同意の表明など、好ましくない応答で呼びかけ語が用いられるとする。一方、談話標識では相手にとって好ましくない内容や予想外の内容を伝える際には、しばしば well が用いられる。

注意喚起の機能と同様に、呼びかけ語と談話標識の違い、両者が共起する場合と単独で用いられる場合の違いを今後明らかにする。

3. 呼びかけ語と談話標識の共起文が用いられる位置と機能

現在までに集めた資料では、TCU での位置に関しては、圧倒的に TCU 頭が多く、次いで TCU 中が多く、TCU 末が最も少ない。文中での位置に関しては、文頭が最も多く、次いで文末が多く、文中が最も少ない。したがって TCU 頭でかつ文頭で呼びかけ語と談話標識の共起が多く見られる。

暫定的ではあるが、それぞれの位置別に特

徴的な機能は以下のとおりである。まず TCU 頭では、呼びかけ語が後続発話に注目するよう注意喚起する談話標識の機能を補完する。ただし、発言権の確保や発話の力を強めるなど、さまざまな機能も持つ。TCU 中では、一連の発話の途中で再び聞き手に注意喚起する談話標識の機能を補完したり、話し手が最も主張したい情報を提示する合図となる。TCU 末では、聞き手に発言を促したり、当該の発話に対する反応を求める機能を持つ。

文における位置に関しては、文頭では談話標識の聞き手に対する注意喚起の機能の補完のほかに、説得や勇気づけ、励ましのような聞き手に対する働きかけを強める機能を持つ。文中では、呼びかけ語によって発話の後続部分に注目させる。文末では、呼びかけ語によって主張や命令、反駁といった発話の力を強めることが多い。一方で、親愛の情を示す呼びかけ語では発話の力を弱めることもあり、話し手と聞き手の対人関係の調整に役立っている。さらに例を集めたうえで、後編でこれらのことを確認・修正する。

4. 呼びかけ語と談話標識の共起文の特徴

現在までに集めた資料に基づいて、呼びかけ語と談話標識が共起した例から、暫定的ではあるが特徴的な事柄を談話標識の語別に述べる。なお、紙幅の都合上、本論中に例文を挙げていないものもある。

now では呼びかけ語は談話標識に続いて圧倒的に文頭で多く用いられる (9)。文末では命令文と用いて、命令内容を念押しして命令の力を強める (11) (15)。文中の例は現段階では見つからない。look でも呼びかけ語は圧倒的に文頭で多く用いられる (2)。now も look も注意喚起の機能を持つことから、呼びかけ語が文頭にくると思われる。

情報を受け取ったことを示す oh と、次の行動に移ることを合図する OK でも、呼びかけ語は通例文頭で用いられる。

会話の開始や本題の導入、話題転換を表す

soでも、呼びかけ語は文頭で用いられることが圧倒的に多い (1) (4)。ただ文末で用いられることもあり、文頭の場合と違いがあるのかを今後明らかにする。

well は多用される談話標識で、機能も多様である。呼びかけ語との共起例を見たところ、well と呼びかけ語が you know、ah、now、oh といった他の談話標識と共起することが多い (19)。well が会話の切り出しや話題転換を表す場合には、呼びかけ語は通例文頭で用いられる。well が思案やためらい、聞き手の予想に反する事柄を述べる合図となる場合には、文末で用いられることが多い (13) (16)。また、ためらいながらも自分の意見を主張する場合も文末が多い。

but では(12)のように、呼びかけ語が文末で用いられると、but が持つ反駁という強い態度をさらに強めることになる。

VI. 2. で談話標識は後続の発話の方向性を示すことができるが、呼びかけ語にはその機能は(ほとんど)ないと思われると述べた。(10)で呼びかけ語が文中で用いられる例を挙げたが、この機能は聞き手に後続の情報に注目するよう促すことであった。談話標識が文中で用いられる場合は、聞き手の注意を喚起したうえで、次にどのようなタイプの情報を提供するかまで示唆すると思われる(注3)。

今後さらに資料を集め、呼びかけ語と共起する談話標識の関係、呼びかけ語が用いられる位置による機能の違いなどを検討する。

VIII. おわりに

最後に、本稿をとおして見えてきた論点を整理する。談話標識と共起する呼びかけ語が用いられる位置に関して、従来から論じられている文中における位置のみならず TCU における位置も合わせて、呼びかけ語の機能を再考する必要がある。また、呼びかけ語の機能に関して、共起する談話標識の機能を補完するのか、あるいは談話標識の機能とは別の機能を

担うのかを確認し、呼びかけ語が談話標識と共起した場合のコミュニケーション上の効果を考察する必要がある。

呼びかけ語に関しては、「呼びかける」という行為によって、相手との何らかの関係を築いたり維持したりして相手に働きかけることができる。また、呼びかけ語自体の形式（相手との距離を縮めて親愛を表す表現か、相手との距離を取って敬意を表す表現かなど）と呼びかけ語の機能との関連も考慮する必要がある。

注

1. 談話標識には、具体的な発話がなくても、発話の状況を受けて用いられる場合がある。たとえば so には、発話の状況から推論して結論を述べる用法がある(松尾他(編著) 2015 : 203, 204)¹³⁾。
2. (6) で用いられる記号 look では、下線部が強く発音される。
3. 談話標識が文中で用いられると、聞き手の関心を集める焦点化機能を持つ。たとえば、however は対比の対象となる項目の直後で用いられて対比項目を焦点化する。kind of や like は話し手の慎重な言葉づかいを示唆し、後続の新情報や重要な情報を導入して焦点化する(松尾他(編著) 2015 : 44, 52, 59)¹³⁾。
- 4) Zwicky, A. M. 'Hey, Whatsyourname!' *Chicago Linguistic Society*. 1974, 10, 787-801.
- 5) Leech, G. 1999. 'The Distribution and Function of Vocatives in American and British English Conversation.' *Out of Corpora : Studies in Honour of Stig Johansson*. H. Hasselgård and S. Oksefjell (eds.). Rodopi, 1999, pp.107-118.
- 6) Carter, R. and M. McCarthy. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge University Press, 2006, 973p.
- 7) Shiina, M. 'Positioning and functioning of vocatives : A case study in historical pragmatics (1)'. *Bulletin of the Faculty of Letters*. 法政大学, 2007, 55, 17-32.
- 8) Shiina, M. 'Positioning and functioning of vocatives : A case study in historical pragmatics (2)'. *Bulletin of the Faculty of Letters*. 法政大学, 2008, 56, 29-48.
- 9) Butler, C. W., S. Danby and M. Emmison. 'Address terms in turn beginnings : Managing disalignment and disaffiliation in telephone counseling.' *Research on Language and Social Interaction*. 2011, 44 (4), 338-358.
- 10) Schaden, G. 'Vocatives : A Note on Addressee-Management.' *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*. 2005, 14 (2), 176-185.
- 11) 松尾文子・廣瀬浩三. 「英語談話標識の諸相 (1) — 英語談話標識研究の変遷 —」 『梅光言語文化研究』 梅光学院大学国際言語文化学会, 2014, 5, 1-38.
- 12) 松尾文子・廣瀬浩三. 「英語談話標識の諸相 (2) — 談話標識についての基本的考え方と分析の観点 —」 『梅光言語文化研究』 梅光学院大学国際言語文化学会, 2015, 6, 1-51.
- 13) 松尾文子・廣瀬浩三・西川眞由美 (編著). 『英語談話標識用法辞典 43の基本ディスコース・マーカー』 研究社, 2015.
- 14) 松尾文子. 「『英語談話標識用法辞典 43の

文献

- 1) Zwicky, A. M. 'Hey, Whatsyourname!' *Chicago Linguistic Society*. 1974, 10, 787-801.
- 2) Levinson, S. C. *Pragmatics*. Cambridge University Press, 1983, 420p.
- 3) Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, et al. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, 1985, 1779p.
- 4) Biber, D., S. Johanson, G. Leech, et al. *Longman Grammar of Spoken and Written*

- 基本ディスコース・マーカー』をめぐって—
談話標識をどう記述するか—『梅光言語
文化研究』梅光学院大学国際言語文化学
会, 2016, 7, 1-19.
- 15) Fraser, B. 'Pragmatic markers.' *Pragmatics*.
1996, 6 (2), 167-190.
- 16) Fraser, B. 'Topic Orientation Markers.'
Journal of Pragmatics. 2009, 41, 892-898.
- 17) Fraser, B. 'What are discourse markers?'
Journal of Pragmatics. 1999, 31, 931-952.
- 18) Brown, P. and S. C. Levinson. *Politeness :
Some universals in language usage*.
Cambridge University Press, 1978 / 1987,
345p.
- 19) Clayman, S. E. 'Address terms in the
organization of turns at talk : The case
of pivotal turn extensions.' *Journal of
Pragmatics*. 2012, 44, 1853-1867.
- 20) Rendle-Short, J. "Catherine, you're wasting
your time" : Address terms within the
Australian political interview. *Journal of
Pragmatics*. 2007, 39, 1503-1525.
- 21) Bolden, G. B. 'Little Words That Matter :
Discourse Markers "so" and "oh" and the
Doing of Other-Attentiveness in Social
Interaction.' *Journal of Communication*.
2006, 56 (4), 661-688.
- 22) Bolden, G. B. 'Implementing incipient
actions : The discourse marker "so"
in English conversation.' *Journal of
Pragmatics*. 2009, 41, 974-998.
- 23) Bolrden, G. B. "So What's Up?" : Using
the Discourse Marker *So* to Launch
Conversational Business. *Research on
Language and Social Interaction*. 2008, 41
(3), 302-337.
- 24) Sidnell, J. "Look"-prefaced turns in
first and second position : launching,
interceding and redirecting action.'
Discourse Studies. 2007, 9 (3), 387-408.
- 25) Heritage, J. 'Oh-prefaced responses to
inquiry.' *Language in Society*. 1998, 27,
291-334.
- 26) Clayman, S. E. 'Agency in response: The
role of prefatory address terms.' *Journal of
Pragmatics*. 2013, 57, 290-302.

引用作品

[映画]

The Firm 1997 [*Firm*]
Maid in Manhattan 2003 [*Maid*]
Verdict 1995 [*Verdict*]

[小説]

Archer, J. *Not a Penny More, Not a Penny
Less* 1976 [*Penny*]
—. *Kane and Abel* 1979 [*Kane*]
Grisham, J. *The Firm* 1991 [*Firm*]
—. *Skipping Christmas* 2004 [Christmas]
—. *The Associate* 2009 [*Associate*]
Harper, K. *Falling in Love* [*Love*]
Parker, R. *Family Honor* 1999 [*Family*]
Tyler, A. *The Accidental Tourist* 1985
[*Tourist*]